インド・シナ半島のチャム人の國林邑を伐ち、今の臺灣と考えられている琉球を降し、遠く赤土國（スマトラ島？）にまで遠征軍を派遣し、東方では前後三度に亘つて高句麗を征したが、その失敗を契機として内亂が勃發し、隋王朝は僅か二代・三十餘年で瓦解し去るに至つたのである。

次の唐王朝は、隋末の叛亂に際して、當時太原の留守として突厥の侵入に備えていた唐公李淵（高祖）・李世民（太宗）父子が七世紀の初（六一八年）に開いた王朝であるが、その三百年に及ぶ支配の基礎は、高祖・太宗・高宗の三代、特に事實上の創業の英主である太宗の貞觀時代（六二八―四九年）から、次の高宗の治世へかけての、約五、六十年の間に置かれたと見て差支えない。先に隋王朝によつて整備された制度や法律――三省六部を中心とした中央官制・科擧の官吏登用制度・均田の土地制度・租庸調の租稅制度・府兵の國民皆兵制度・律令格式の法律體系等――を完整、活用して、貴族勢力との妥協の上に安定した國内態勢を作り上げたのも、このような内部的基礎の上に、更に大運河の物資輸送力を動員して、隋の遺緒を嗣ぐ大規模な對外發展を行い、東は朝鮮半島から、西はパミール高原の内外に及び、北は外蒙古から、南はインド・シナ半島に達する世界帝國を建設し、いわゆる六都護府を置いて、東亞諸地域の大部分を支配したのも、ほぼこの間のできごとに外ならない。

しかも唐帝國を稱して世界帝國と言つたのは、もとより秦漢帝國を凌ぐその幅員の廣さのためばかりではない。突厥人や西域人の如き、異民族が唐の天子を自らの君主と仰いで天可汗と尊稱すれば、唐の天子もまた華夷を見ること一の如く、「胡越一家、古より未だあらざる」ことを誇りとする有樣で、内容的にも十分に世界帝國たる性格を具えていたからに外ならない。思うに、このような世界帝國の出現を見るに至つた最大の原因は、結局唐が隋の